

観天 望気

耳を傾ける姿勢

「国際的にジェンダー平等の現状をみたときに、なぜ日本の評価はこんなに低いのか」という質問を、大学生からよく受けるようになりまし。質問主の性別や、専門分野を問いません。女性の政治家の少なさから、電車で「男性専用車両」もないとおかしいといった声まで、きっかけの幅は広いのですが、共通点として、「なぜ日本のジェンダー平等はこんなに弱いのか」という疑問が湧くようです。日本でも、学校を卒業するまでの男女平等は、学校現場でも意識され、改善されてきているように見えます。大学の専攻分野における男女差が歴然とあるように、まだまだなところはありますし、個人レベルではさまざまな苦い経験があるでしょう。ただ、多くの学生にとって、本人の希望や得意分野に基づいて選んだはずの進路で、これほど評価が低いとまでは思わなかったようです。

国別にジェンダーのギャップをみる「世界経済フォーラム」の調査によると、日本では教育面と健康面の男女平等は進んでいるのに、経済面と政治面の差は大きくついたままです。つまり、社会に出てからの役割が、旧来の分担のまま固定されてしまっているわけです。その結果、公共・民間の多くの組織で、意思決定層における男女比が著しく男性に偏っているのです。

組織内で、構成メンバーが協調し、力を合わせてものごとくに立ち向かうのは、非常に重要です。方向性を決めるとき、多様な力が合わさると、より強くなれるのではないかと。それが、組織経営において、意思決定層が多様であることを望ましいとする考え方です。

厳密に言えば、性別と意思の多様さは一致しませんが、まだまだ男女比で測る段階にあるのが日本の現状です。組織において、上の立場にある人はまず、男女同数の意見に耳を傾けるよう意識しましょう。下の立場の人は、耳を傾けてくれる上席者を応援しつつ、さらに自分よりも後輩の意見に耳を傾けたいものです。ジェンダー平等の連鎖をつくるのは、誰よりも私たち自身です。



村上 芽

株式会社日本総合研究所 創発戦略センター
シニアスペシャリスト

むらかみ めぐむ
京都大学法学部卒業後、日本興業銀行（現みずほ銀行）を経て2003年日本総合研究所入社。専門分野は企業のESG評価、環境と金融。著書に『図解 SDGs入門』（日本経済新聞出版）など。内閣府「少子化社会対策大綱の推進に関する検討会」委員、東京都環境審議会臨時委員、大阪府SDGs有識者会議メンバー。